

# 今和次郎の郊外像の位置づけと特異性

## — 『日本の民家』における「東京郊外の村の家」の図の検討を通して—

本間 智希

早稲田大学建築史研究室

今和次郎 郊外 『日本の民家』  
「東京郊外の村の家」 小田内通敏 Patrick Geddes

### 1. はじめに

本研究は、今和次郎 (1888-1973) が抱いていた郊外像を研究対象とする。研究資料は、今和次郎が全国の民家を調査し大正 11(1922) 年にそれらの調査をまとめた『日本の民家』<sup>1)</sup>に掲載された「東京郊外の村の家」と、その図を描く元になった調査の記録である「見聞野帖」<sup>2)</sup>である。

それら資料を用いて今和次郎の調査を復元・再調査し、なぜ今和次郎がその場所を郊外として選んだのかを考察することで、今和次郎の持つ郊外像を明らかにすること。そして、郊外論の変遷の中でその位置づけと特異性を明らかにすることである。本研究の目的は以上の二点である。

### 2. 郊外論の推移

郊外が各年代でどのように社会に認識されたのかを確認する。

#### 2-1. 墨客文人と郊外論考 (1895 ~ 1937 年)

「江戸名所図会」などに見られるように、江戸の住民が日帰りで遊覧できる「非日常の場所」であった郊外は、明治後期になると都市化を背景に墨客文人の郊外に関する動向と論考によって、「日常の場」として社会に認識されるようになった。国木田独歩 (1871-1908) は、『武蔵野』<sup>3)</sup>で詩興を喚び起す町外れの野趣を描いた。「武蔵野趣味」は広く後続を生んだ。一方で、徳富蘆花 (1868-1927) は、散歩者の視点ではなく、自身の田舎住まいから見た村人たちの生活を細やかに描写した。田山花袋 (1872-1930) は『東京の近郊』<sup>4)</sup>で、東西南北の景色の美しさを紹介した。

#### 2-2. 田園思想と田園都市 (1907 ~ 1928 年)

「田園都市」は、郊外趣味に伴うスプロール現象に対して一定の計画を与える為に生み出された。農村・地方都市の改善を掲げた「田園都市」は、当時の文学界の主流であった「白樺派」に代表される「田園思想」を背景に社会に広まった。この「田園都市」の理念の下に計画された郊外住宅地は、地価の高騰や相続税の問題などで所有規模の平均化・細分化が進み、今日に至る住宅街の形成の典型となった。

#### 2-3. 以降の郊外論 (1929 ~)

どこまでも続く密集した住宅街が郊外の風景として一般的になると、郊外は主に社会学者などによって、経済と郊外生活者のライフスタイルや階層の関係、その結果生じる事象 (事件や風景など) によって語られるようになった。

### 3. 今和次郎の郊外論考と推移

今和次郎の郊外に関する動向は、大きく三つの区分に分けることが出来る。<sup>5)</sup>各々について代表的な論考や活動を中心に、今和次郎の郊外論考の特徴とその推移を確認する。

#### 3-1. 第一期【『都市改造の根本義』<sup>6)</sup>における今和次郎の郊外像の発端】(1912 ~ 1918 年)

今和次郎は、農村と都市は本来それぞれ目的が異なっており、根本的に違うものであると述べ、Patrick Geddes の図 [図 1] を引用して、都市は四方に延びる交通網に沿って形成されていくことを説明した。



図 1: 都市の伸び方 出典: 『都市改造の根本義』

#### 3-2. 第二期【『日本の民家』中で今和次郎が描いた郊外】(1917 ~ 1923 年)

『日本の民家』初版で、郊外という言葉を取り上げている項は「郊外町の生成」「處女郊外地への同情」「東京郊外の村の家」の三つである。「郊外町の生成」は、漸次郊外へ東京の街が食い込んでいく態を描き、都市化の生成を断面的に論考した。「處女郊外地への同情」は、都会から吐き出されたような郊外の現状を嘆き、また近郊農村は都市の養分をうけて生長している分単純農村に見られない美しさがあると述べた。「東京郊外の村の家」[図 2] は、東京の東郊と西郊の宅地構成の比較を示した。『日本の民家』に掲載されている他の民家がそれぞれ一つの地域だけを描いている中、二つの地域を比較している点において特異である。

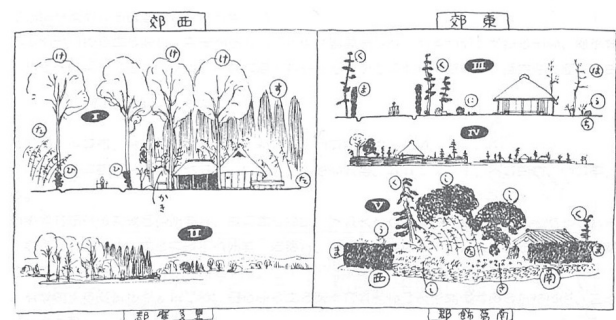


図 2: 東京近郊農家の屋敷 出典: 『日本の民家』

#### 3-3. 第三期【『郊外と考現学』(1923 ~)

関東大震災以後、活動の拠点を都市へ移した今和次郎は、「郊外風俗雑景」など郊外生活者の生活パターンを統計的にまとめた。また『新版大東京案内』では郊外の発展を、人口増加率や交通網の発達などの要因で論考するようになった。

### 3-4. 今和次郎が抱く郊外像の推移

「東京郊外の村の家」は重版ごとに表題が訂正された[図3]。つまり「東京郊外の村の家」で実際に

初版	「東京郊外の村の家」
二版	「東京近郊の村の屋敷」
三版	「東京附近の村の屋敷」 (以降四版五版同様)

描いた今和次郎にとっての郊外像は、今和次郎にとって後に郊外と呼べなくなったことを示している。第二版以降の『日本の民家』は、第三期で見られるような都市化が止まらない郊外をなんとか把握しようとする今和次郎の郊外像と接近していった。逆に、郊外そのものについて地名と絵で明示したのは『日本の民家』初版「東京郊外の村の家」が唯一であることが分かった。

今和次郎は、東京近郊の農村は「作物が複雑になり、手入が濃密になり、土地のあらゆる農事的利用が濃厚になる」ために「都会から近ければ近いほど、こんな一種の魅力に富んだ美しさを増して来る」<sup>7</sup>と述べ、「都会の家」と「田舎の家」の間に決定的な断絶を察知していたにも関わらず、都市と田園の接触し合ったものが郊外であると認識している。東京近郊の農村風景を描いた「東京郊外の村の家」は、単に東郊と西郊の比較を示しているだけでなく、都市と田舎の断絶に横たわる今和次郎にとっての郊外を具体的に描いたものであったことが分かる。

### 4. 復元・現地調査—今和次郎の見た東郊・西郊—

初版の「東京郊外の村の家」で今和次郎は具体的に郊外に何を見ていたのか。「見聞野帖」から「東京郊外の村の家」を描いた調査と特定した二つの調査について今和次郎の特徴的な記述を復元し、現地調査と資料の確認により分析する。

#### 4-1. 西郊【甲州街道調査 1917年7月11日、1918年9月29日】

甲州街道沿いで人文地理学者である小田内通敏(1875-1954)と共におこなった集落調査。今和次郎は小田内の『帝都と近郊』<sup>8</sup>の挿絵を、本調査をもとに多く描いた。

■街道 今和次郎は甲州街道沿いの各地域を「郊外町の生成過程の模型図」[図4]に描いた。甲州街道はもともと江戸城陥落の際の将軍の避難路として造成されたため、通常は輸送路であり、旅人や大名行列による交通は少なかった。そのため街道沿いの発展は1916年の京王線新宿追分駅-府中駅の全通まで待った。市内から漸次都市化していく様子を今和次郎はリアルタイムで描いている。

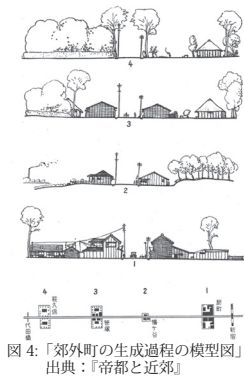


図4:「郊外町の生成過程の模型図」  
出典:『帝都と近郊』

■地形 甲州街道は武蔵野台地東端の江戸城から外側へ伸びる街道の中で唯一の尾根道であった。今和次郎



図5:「甲州街道管塚付近」  
出典:『帝都と近郊』

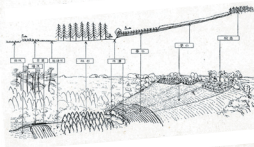


図6:「表土の厚薄及乾湿と作物との関係」  
出典:『帝都と近郊』

は街道の両側に広がる傾斜地を活かした土地利用を描いている[図6]。当時共同経営だった傾斜地が同じような分割のまま現在は住宅街となっている[図7]。



図7:「渋谷区大山町、旧大山園傾斜地付近」  
筆者撮影

#### 4-2. 東郊【葛飾郡水元村調査 1918年10月17日】

民家のほかに集落風景のほか地形や部分スケッチを残した。



図8:「水路と畦の関係」出典:「見聞野帖」

■水路 水路の幅や畦の関係を寸法を入れて多く採集している[図8]。同地域は市内で野菜と下肥を交換する為の交通手段として船運が使われた。

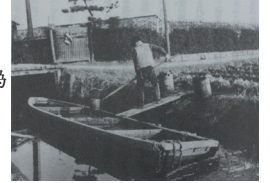


図9:「肥溜と水路」出典:「葛飾郡史」

■肥溜 今和次郎は工芸的な屋根が架かった肥溜を描いている[図10]。同地域で代々農家だった古老(現在植木屋)によると、立派な屋根の肥溜は同地域より遠方の田園には見られず、野菜供給によって経済的に潤った近郊農村に特徴的なものである。

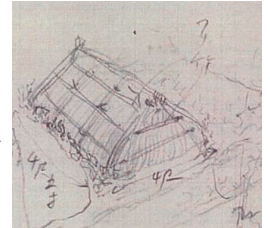


図10:「肥溜」出典:「見聞野帖」

以上、今和次郎は東郊西郊それぞれの地域で、東京に近接している為に特有なものを描いていたことが分かった。

### 5. 考察

#### 5-1. 今和次郎にとっての郊外の位置づけ

今和次郎は東郊は終着駅、西郊は[図4]の4のように都市と田舎の接触部を探っていた。つまり、両調査地の東京における当時の位置関係は、[図1]における点線部分=均衡線であったことが分かる。

#### 5-2. 今和次郎の郊外の郊外論における特異性

今和次郎にとっての郊外と郊外論は、以下のよう比較できる。

- ・今和次郎は墨客文人たちの言及した田園趣味や郊外生活者に対して、郊外と純粋農村との違いを明確にし、都市に近接しているからこそ生まれる近郊農村の特徴を描いた。
- ・「田園都市」などの田園思想が目指した都市と田園の融合に対して、両者の間の決定的な断絶を認識していた。
- ・都市化のみを扱った小田内通敏に対して、今和次郎は都市と田舎のせめぎあう均衡線を扱った。

以上の点において、今和次郎の郊外は特異であると言える。

### 6. 結論

今和次郎の抱いた郊外像は、都市に近接しているからこそ生まれる近郊農村の特徴を描いている点で、また東郊・西郊における断絶した都市と田舎の双方のせめぎあう均衡線を比較している点で、他の郊外論において特異であり、それこそが今和次郎の抱いた郊外の特徴であった。

1 今和次郎『日本の民家』鈴木書店(1922年) 2 「見聞野帖」とは、今和次郎自身の大正6年の民家調査以降、調査時の記録として用いた個人的なスケッチブックのことである。個人的なメモ帳を整理し、六冊のスケッチブックにまとめなおし、工学院大学図書館に所蔵されている。「見聞野帖」の閲覧に際しては、工学院大学図書館の厚意に預かった。3 岡本田雄歩「武蔵野」『国民之友』(1898年) 4 田山花袋『東京の近郊 一日の行楽』博文館(1918年) 5 今和次郎『都市改造の根本義』『建築雑誌』(1917、1918年) 6 第一期は、東京美術学校卒業の大正元(1912)年から大正7(1918)年までで、今和次郎は主に都市考究を中心に据えていた時期である。第二期は、大正6(1917)年から大正12(1923)年までで民家調査を中心におこなっていた時期である。第三期は関東大震災が発生した大正12(1923)年以降、今和次郎が活動の中心を都市に移した時期である。7 今和次郎『日本の民家』岩波書店(1989年)P.107.15 8 小田内通敏著『帝都と近郊』大倉研究所(1918年)